映像都市社会学の構想に向けて

——私的経験から——

Toward the Establishment of Visual Sociology

倉沢 進

Susumu KURASAWA

I engaged in production of TV programs of urban sociology as a professor of Open University of Japan 1997-2004. My first program was “Comparative Sociology of Urban Spatial Structure.” In my first lecture I discussed on M. Weber’s method of “Nacherleben und Verstehen” and told that the program as a whole (15 lectures) should be a travel of Nacherleben of the development of urban sociology. Basemaps of Chicago by E.W. Burgess, W. Firey’s three land use areas in Boston, city of Newberyport where W.L. Warner’s “Yankey City” project took place, four settlements in Yucatan Peninsula which led Redfield to the folk-urban continuum, all appeared on air.

During this location activities I found another significance of program production. The first example was Hull House, the first settlement house in Chicago, where I found a detaild social map of a Chicago slum block that shows resident origin by each building. I was much impressed to discover myself that the work was done by settlement staff for practical purpose 30 years before concentric zone hypothesis by Burgess. Open University students could also “Nacherleben” my exciting experience of discovery. After many such experiences during location activities, I reached a concept somewhat like visual research.

I extended my work in my last program “Cities and Mankind” on the same concept. In the Symposium, the lecture 4, “Siena : feast and local residents association” was put on the screen.

Young proposed dicipline of visual sociology has many contoroversial problems two of which I mention as follows.

- (1) Whether image is raw data or final product of study. In my sccial atlas project case, ratio of young/ old/ nuclear family / whitecollar workers and so on are the data, and they are categorized, verbal in character. After complicated process of K.S. method cluster analysis each of 2000 unit areas of Tokyo was asigned to 20 types of simmlar characteristics. It is the final product of social atlas, which is visual. Professor Ymanaka’s seamless image would be in one sense data and and in another final outcome.
- (2) How visual sociology could obtain reliability and validity which are important criteria for standardized sample survey? The criteria would be not the same as standardized sample survey. New criteria must be designed.

映像都市社会学という方法ないし領域があるという着想を持ち、その開発を進めてこられたのは、このシンポジウムの企画者であり司会者でもある後藤範章氏である。シンポジウムの登壇者である山中速人氏、丹羽美之氏は、映像メディアを、社会学ないし文化論の観点から取り上げ、自らその制作に当たり、映像フィールドワークを提唱してこられた。

私はこれらの方々と違い、映像メディアを主体的に取り上げてきた者ではない。たまたま都立大学退職後、放送大学の招きを受け、つまり授業をテレビ・ラジオで行う大学に就職したという受け身の事情から、映像メディアとの接点を持った人間である。映像フィールドワークという概念は、私は最近後藤氏に教えられたわけであるが、戸惑いながらテレビ番組の制作にかかわるうちに、それに後藤氏の言う映像フィールドワークと似た発想を持つようになった。本稿では〔1〕私が放送大学の番組制作に当たり、何を考え、どのような方針で映像番組の制作に当たったのか、〔2〕現場での撮影に当たってどのような経験ないし発見を映像フィールドワーク的な発想を持つようになったのか、〔3〕私が主任講師として制作に当たった実例としての「シエナー祝祭と地域住民組織」の概要とともに放送大学の番組制作方法とその問題点について述べ、〔4〕社会調査のデータ源の多様化と映像社会学および社会地図の意義、〔5〕今後の展望、についての私見を述べることにする。

〔1〕

放送大学で自分自身教材制作をすることになり、とりあえずいくつかの放送中の番組を見た。思ったのは、テレビで講義をする必要がないのではないかとと思われる番組の多い事であった。ひとつは総理大臣の施政方針演説の中継のような番組である。45分間教員の顔が映し出され、原稿を見ながら読み上げているもの。もうひとつは予算委員会質疑中継型。グラフやキーワードを書いたボードを画面に映しながらこれを解説しながらしゃべるというものなど、多少の工夫の見られるものがある。しかしこれらは印刷教材さえいいに作ってあれば、放送は要らない、少なくともテレビでやる必要はない教材ではないかと思われた。

そこで私が放送大学で初めて作ったテレビ授業では、映像の持つ力をできるだけ発揮できるように、都市の空間構造に焦点を合わせ、都市社会学の展開過程で重要な意味を持った研究の現場を紹介する内容とした。

都市社会学という学問が、えらい学者が研究室の中で葉巻をくゆらせながら理論体系をひねり出してできたものではないこと、特定の時代、特定の都市の現実の問題状況に直面した研究者が、懸命にその問題の解明・解決に取組み、ある事実を発見し、ある考え方に到達した、そういう努力の積み重ねでできていることを理解してもらおうと考えた。そこでこの科目の第1回番組では、マックス・ウェーバーの追体験と理解という方法を紹介

し、15回の放送全体を都市社会学の発展の追体験の旅として構成することを述べた。

そういう意味でシカゴ大学図書館のバージェス同心円仮説を生んだ膨大なベースマップ類、ボストン中心部の同心円説では説明できない土地利用とされたファイアレーの調査した3地区の映像、ヤンキーシティ研究の現場ニューベリーポートの映像、レッドフィールドの都市農村連続体説の素材となったメキシコ・ユカタン半島の4集落、といった映像を組み込む為、海外ロケを行ったのである。

あわせて、日本都市社会学会の先生方の講義支援である。今述べたような現地資料を多く入れこんだ映像があれば、全国の大学で都市社会学の講義をされる多くの先生方に役立つだろう、それはその講義を聴く全国の放送大学以外の学生諸君をも、追体験の旅に誘うことになるだろう。そのようなささやかなアーカイブを作りたい、そんなことを考えたのである。

[2]

この1998年度の初めての番組制作過程で、私は映像番組制作のもう一つの意味を知ることになった。シンポジウムに参加された読者には、シカゴのハルハウスの映像をちょっと思い出して頂きたい。

私の予定では、シカゴ学派の都市研究が単に研究室内で誕生したのではなく、研究者自身が都市問題の巣窟であった当時のシカゴで、さまざまな社会問題に直面し、さまざまな社会実践にかかわり、自身の問題意識を磨き、方法を磨いたことを明らかにしたい。その典型的な例として、ハルハウスを取りあげようと考え、ロケ計画の中にハルハウスの取材を何気なく組入れたのであった。ところが現地でハルハウスの調査研究活動の一例としてホールに展示されていた小地区の詳細な社会地図に接して、大きな衝撃を受けることになった。小ブロックの各建物の中に居住していた住民の、出身国別のきわめて精細な地図である。それはイタリア系の人々は同国人と共に集住する傾向とか、ポーランド人は分散して住む傾向などが、実にはっきりと示され、それぞれにどのような社会的支援が必要かを如実に示すものであった。このような社会地図がバージェス同心円モデルの発表の30年も前に、実践目的の為に、研究者側の示唆もあったかもしれないけれども基本的にはセツルメントの実践者の主体的活動として、作成されていたことに驚いたのである。このような事実は、シカゴに留学された方々には既知の事実であったかと思うが、留学経験のない、そして文献でもそのような指摘をした文献に接したことのなかった私には、大変新鮮な驚き、感動であった。

一般に放送大学の教材づくりは、大英博物館に行けばロゼッタストーンがある、その前で教員が解説をすればよい、こういう考え方に立っている。そこでは教員の新鮮な驚きは想定されていない。それならばロケに教員が立ち会う必要も無くカメラマンが行けばすむ

こと、もっと言えばロゼッタストーンほど有名なものであれば百科事典の写真ですむことであろう。ヤンキーシティの映像とか、ユカタン半島の4地域の映像などは、NHKのアーカイブにも百科事典にもないであろうから、その映像を現地で撮影するという考えであった。

ハルハウスは一例でしかないが、この経験を含めて『都市空間』15本の番組制作過程で私自身が多く「犬も歩けば棒に当たる」経験をして、映像制作過程での製作者自身の学習、フィールドワークの機会を得ることの重要性に気づかされたのである。ロケは単に教員研究者の既知の知識を、学生のために映像化することではなく、新しい情報の獲得過程としてフィールドワークと等しい新鮮な驚き、予定外の学習効果を含むことを知ったのであった。そして放送大学の学生は番組を通して私のこのような驚きの学習を、何ほどか追体験できたのではないかと思う。

私はこのような経験から、番組制作に、3つの喜びがあることを知ることになった。第1は、私自身の研究者としての新しい知識獲得の新鮮な喜び、第2は、放送大学の受講者の私の喜びの追体験、第3は、都市社会学の教育に当たる皆さんへの教材資料の提供である。

私にとって放送大学最後のテレビ科目は、ギリシャ史の伊藤貞夫さん、都市計画の香山寿夫さんと私の3人を主任講師とする学際的な総合科目『都市と人間』であった。この中で私は導入の第1回で伊藤さんと、展望の最終回で香山さんとの対談を行った他、北の中世のグローバル都市リュベック、南のシエナ、近代大都市の典型にして異端であるシカゴ、そして皇帝至上・風水という強固な理念で形作られた都市北京を、都市の諸類型の提示と共に、私にとっての学習の場としてとりあげた。シンポジウムでは、私が「犬も歩けば棒に当たる」ことを期待して行ったフィールドワーク、都市と人間第4回「シエナ・祝祭と地域住民組織」を例として取り上げ、45分の番組から後藤氏が約24分に編集された映像を上映したのである。シンポジウム参加の読者には記憶を呼び覚まして頂き、参加できなかった読者にはどのような内容であったのかを簡単に説明したい。

【3】

『都市と人間』の科目では中世ヨーロッパ都市の代表として、北のハンザの女王と呼ばれたウェーバーモデルに近い建設都市リュベック、そしてエトルスキ人以来古い歴史と、したがって複雑な社会構成を持つ、イタリア・トスカーナ地方のシエナを取り上げた。リュベックでは空間構造と市民自治の相即を中心に市民自治都市としての中世都市のありかた、そして現代に引き継がれた中世都市の生活の諸側面を取りあげた。シエナについてはパリオと呼ばれる祝祭との関連に注目して、地域組織との相即を中心テーマとしたのである。

番組は以下のように展開する。

(1) スタジオ・トーク 都市シエナの紹介 地図 地形 南欧都市 成熟した都市遺産複雑な身分構成 領邦都市国家など。

(2) ロケ・トーク 市庁舎ノーヴェの間（9人の執政官執務室）で、荘厳の聖母の映像を見つつ、美術作品がフィレンツェのようにメジチ家などの邸宅・別荘の壁を飾るなど、資産家個人のための作品ではなく、シエナでは市庁舎・大聖堂など公共空間を飾る都市と市民のための芸術として扱われたこと、シエナの芸術の社会的性格について述べた後、部屋の全面を飾るアンブロジーオ・ロレンツェッティの大作「善政の効果」を見ながら、領邦国家の農村部である城門外のコンタードの風景、城門内の市街の情景を紹介し、中世のシエナの具体的なイメージを示す。

(3) スタジオ・トーク パリオの解説 エントリーするのも競争するのも馬や騎手ではなく地域住民組織コントラーダであること。オンダ（波コントラーダ）の旗振り、キオッチョラ（カタツムリ・コントラーダ）のパレードなどコントラーダ内部の年齢階梯別の役割構成 コントラーダの役員の一般的役員とパリオ対策の二元的構成 友好／宿敵コントラーダなどコントラーダの相互関係など。

(4) 現地インタビュー オンダ（波コントラーダのカピターノ＝パリオ対策委員長）カピターノの役割、馬と騎手の割り当てなどパリオ運営にかかわるコントラーダの仕事。

(5) ロケ・トーク カンポ広場で（ウェーバーは中世都市一般にはマルクト広場が市場と政治的空間の両方を兼ねているのに対し、シエナではこの両者が分離し、カンポ広場が政治的軍事的広場として機能していることに言及している）

カンポ広場がパリオの舞台となること、広場の形態が10本骨の扇形（ノーヴェに由来）、聖母のマントとされている政治的軍事的広場であること、この日はパリオ当日の4日前で、馬場への土入れや栈敷席の設置などが行われていること。

パリオの語義の多元性 もとの意味、優勝旗＝パリオ → 主イベントである裸馬による競馬＝パリオ → 祭礼全体＝パリオ

内側からの視線 庶民 入れこみの土場 無料

外側からの視線 中流 バウチ（仮設スタンドの座席） 座席券購入者

上からの視線 上流 周辺建物のバルコニー（現在は人一人立てる面積を仕切って販売）

(6) 現地インタビュー アスキエリ教授 市庁舎の裏側、市場広場の見える同教授宅庭園で。前夜教授の論文を受取り徹夜して読む。始めにこの論文に感銘を受けたこと感謝。

内容はパリオの歴史の変遷。シエナは都市国家共和国の首都であり、初期パリオは人々が捧げものを持って集まる行事。

13世紀～1730年境界敕令までの変遷。

始めは都市国家の祭り 広場でなく北門～大聖堂 騎手は君主・貴族・騎士。

まだコントラーダはかかわらない。

やがて地域住民の競技 プーニエなど カンポ広場で行われるようになる。

15世紀になると 競技グループ名 ドラゴ（竜）、タルトゥーカ（亀）が登場。

行政区域は42から1730年以降の17地区（これが現代まで続く）まで、いろいろの変化をした。コントラーダ名=実在／想像上の動物、祝祭地区=若者の競技集団の名称、ギルド、教区、市民群の編成基礎、行政区域などさまざまな要素が重複し、時代ごとに複雑に変化した。

この変化自体がコントラーダが単なる教区組織、行政区域に止まらないことを示す。

(7) スタジオ・トーク コントラーダの機能

映像 キオッチョラの洗礼式 コントラーダ会長（プリオーレ）が司祭役の入会式。

コントラーダの社交的・福祉的組織、日常的共同生活の場としてのソチエタの存在。

映像 オンダのソチエタ・デュプレ 日常共同生活の場 バール ゲーム室 宴会場
屋外の集会広場を持つのはオンダの特徴

(8) インタビュー オンダのプリオーレ（コントラーダ会長）

オンダは歴史的に大工の居住地区。教会もギルドからコントラーダに譲渡。

ソチエタ 起源は相互扶助 現在も福祉機能・社交機能を果たす。

(9) スタジオ・トーク 旧市内歴史地区17コントラーダの地図

コントラーダの領域と街路。映像 街路境にコントラーダの標識。

(10) インタビュー アスキエリ教授再登場

クラブの特定階級性に対し、コントラーダの非階級的包括的地域性。

パリオの機能 パリオ準備・役割分担で住民の社会化が行われること。

ソチエタによる相互扶助 住宅提供 結婚時の持参金補助に及ぶこと。

ソチエタには福祉の他、日常的な集会娯楽など共同生活の場の機能。

領域の現代的課題 城門で内外つながるコントラーダ 人口増 一体感に問題がある。

城門を持たず城内のみのコントラーダ 人口減 活気を喪う 活動の維持に困難がある。

(11) スタジオ・トーク コントラーダの多様な資産

物的資産 道路 広場 — 日常的な共同生活、社会化の場。

泉 — 水の供給源、洗濯の場など中世の丘の上の都市における重要性。

馬小屋 — パリオ直前の数日の競走馬の他コントラーダから安全を守る。

本部 — 礼拝堂、集会室、博物館、事務室。

ソチエタ — バール、遊戯室、宴会場。野外施設ある場合も。

シンボリック資産 守護聖人

紋章 旗印 色 シンボル動物

背景ギルド 歴史的経緯

優勝パリオ 記念誌

映像 イストリチェ（山あらしコントラーダ） 集会室 プリオーレのイス。

博物館 獲得パリオ パレードの衣装 25年ごとの新調。

教会堂 コントラーダ主体の世俗性。

本部事務室 PCで住民データ管理。

馬小屋 パリオ前の競走馬の安全確保。

組織人員 プリオーレ以下のコントラーダ役員

カピターノ以下のパリオ担当役員

ソチエタ役員

司祭（シエナ近郊などからの通いの司祭）

行事 パリオ 夏2回だが、準備は通年。

誕生 洗礼 結婚 葬式 これら節目行事すべてにコントラーダ関与。

コントラーダの守護聖人祭日

(12) インタビュー パリオの権威ファラシ教授

シエナ人、トスカーナ人、イタリア人、人類学者として世界人

パリオはシエナ固有と教授は言うが、必ずしも総てとは言いきれない。

三位一体 パリオ、コントラーダ、シエナ

映像フィールドワークがテーマであるから、撮影・制作環境について簡単に補足しておく必要がある。放送大学の海外ロケは、かなり厳しい条件の下で行われる。スタッフについていえば、日本から教員と同行するのはディレクターとサブディレクターの2人だけ、現地ではこれにコーディネータ兼通訳、カメラマン、それに音声・光担当の助手各一人、ロケ車運転手一人という構成が標準である。NHKや民放テレビ局のロケーション・クルーの何分の1ではないかと思う。この場合撮影するのが教員自身ではなく、カメラマンであり、職制上カメラマンに直接指示するのは教員ではなく初対面のディレクターであるということに注意して頂きたい。もちろん打合せはあるのだが、内容は教員の、絵はディレクターの専権事項というのが放送大学の暗黙のルールであり、映像の細かな指示は教員から出せないのが実情である。フィールドワークといっても、研究者がカメラを回すわけではないこと、山中さんや丹羽さんの制作と決定的に違う点であろう。映像フィールドワークにとって撮影者が誰か、撮影クルーの役割分担、せめぎ合いは、大きな論点であると思われる。映像データについては、多面的なデータ群をある視点で切り取るのであるから、この点は重要と考える。

なお日程であるが、古き良き時代には1箇所の撮影2日、休憩1日であったと聞かすが、私の在職時にはそのような余裕はなく、想定外の状況に対応したり補充したりすることはきわめて困難というか、即座に対応することが求められた。もちろんロケハンを別の日程で組むことは許されず、出たところ勝負であった。このシエナのロケの際は、北ドイツの

リユーバック撮影2日、翌日ハンブルク、ミュンヘン乗り換えフィレンツェ経由シエナ入り、現地スタッフとの打ち合わせが予定されていたが、イタリアの航空管制官のストでミュンヘン、フィレンツェ間の便が欠航となり、結局タクシーで9時間かけてアルプス越えをする羽目となった。そのあとも移動日には不能であった打ち合わせを翌日の日程の中に割り込ませ、それを含めての2日のシエナ撮影、夜成田へ帰着しても帰宅は許されず、3時間後の便で北京へ飛ぶという日程であった。

時間の制約はもう一つの問題を生む。インタビューは、相手方との切り結び、質問の積み重ねでテーマの深みに迫るいわゆる質的調査の醍醐味であるが、言語と絡んで大きな制約をもたらす。シエナでの専門家や住民リーダーとのインタビューは、私の質問、通訳のイタリア語、インタビューイのイタリア語、私の第2の質問と続き、第1の質問が相手方に通じそれへの適切な回答が得られたかの確認無しに、第2、第3の質問を繰り返さなければならないのが実情であった。したがって前記アスキエリ教授の回答は、必要なコメントがこのあと出てくるか不安なため、計2時間近くカメラを回すことになった。正確なコミュニケーションが進行していたのかは、帰国後に訳文が届くまではわからない仕組みである。パリオやコントラダについての当方の知識、現場での状況判断、薄氷を踏む進行過程でのとっさの機転などなど、私の研究者、インタビューアーとしての資質が試されることになる。評価はシンポで番組を見られた読者の判断に待つ他ない。

〔4〕

さてこれまで映像社会学的なフィールドワークの一つの試みとしての、私の番組制作のケースを紹介してきた。映像社会学という発想は、映像の制作がビデオカメラなどの映像技術のめざましい開発によって容易になってきたのが大きな理由の一つであろう。しかしそれはそのような技術環境の変化だけに、理由があるわけではない。社会調査の源データについて、これまで当然の前提とされてきた言語化されたデータの他に、多様なデータソースを認めよう、求めようとする要求の一環でもある。それは多様なデータ源一般についての要求であるが、同時にデータ素材の自由度の拡張への要求の一環とも言える。以下には社会調査データの性質、種類、その多様化に関して、現時点での私見を述べておきたい。

標準化調査法が、言語データのカテゴリー化・記号化への方向が強過ぎ、カテゴリー化・記号化によって原データの奥行きのある豊富な重要な情報が喪われることへの不満から、言語の自由化を求めていわゆる質的調査への期待がふくらんだのも、この動きの一環であるとも言える。映像社会学の発想は、一方において映像制作を容易にする技術環境のめざましい革新というプル要因と、他方において標準化調査に対する不満・反省によるプッシュ要因とに助けられて登場したものとえよう。

これまで社会調査と言えば、主流は標準化調査であった。社会調査協会のカリキュラムは、現時点での実証的研究にかかわる多くの社会学者の共通理解を基準として編成されたものと言えるが、ほとんどは標準化調査を前提として組まれており、念の為に質的調査の概略を補足的に編入しているに止まる。しかしこの両者ともデータ素材は言語化された情報にほぼ限られている。標準化調査が言語化されたデータを可能な限りカテゴリー化し記号化し、これを分析素材とするのに対し、いわゆる質的調査はむしろカテゴリー化・記号化されない言語情報を素材としてきた。それはカテゴリー化・記号化されない情報こそが、調査対象者の本音を端的に示すものとして、それをとらえようという思考に支えられたものであった。研究者があらかじめ設定したカテゴリーのなかから、一つを選択肢として選ばせるという標準化調査との相違点である。その意味ではいわゆる口述の生活史研究が、その典型といえることができる。

やや視野を広げて考えれば、聞き取り調査、実態調査などと呼ばれる各種の調査は多かれ少なかれ言語化されたデータを主として、その他にもさまざまなデータ源を利用するものであった。社会学の中で言えば家族・村落・反社会的集団などに関する研究では、多くの聞き取りによるデータ収集に主力をおきながら、これに加えて、家の物理的構造、調度や食材、行事や作法などの生活習慣等々、視覚的素材をも含む、多様なデータ源を用いるものであった。そして文化人類学、民俗学などの研究も、このような多様なデータ源を利用する点では社会学よりも積極的であったと言えるかもしれない。官庁などの調査もまた、官庁統計類を多用する他、この種の聞き取りなど、多様なデータ源を利用するものであることは言うまでもない。しかしこれらの方法は、目的、利用の範囲などについて雑多な調査法の集合体としてのみ、存在する。そこに包括的な体系性を求めることが困難である。

標準化調査法は、計量的方法のもつ普遍性、信頼性、専門性、技術的客観評価の可能性などの理由で、これらの雑多の調査法に対して形式的優越性を持っている。標準化調査法は、信頼性と妥当性を確保するため、入手するデータをきわめて禁欲的に限定し、それを統計的に解析する。それ故に上記のような優越性を他の調査法に対して保有してきた。逆に言えば、形式的優越性の点で標準化調査に及ばないこれら多様な方法、データ源の多様性を改めて重視しようという動きは、標準化調査法に対するかなり根源的な疑問のもとに成立しているのではないか。それは何か。

要因は二つ指摘できる。一つはプライバシー志向の高まり、個人情報開示の忌避など近年における調査環境の悪化である。RD法などのサンプル調査の有効回収率は70%を切っているようである。私が多くのこの種の調査を行った当時の有効回収率90前後と比べると、余りの変化に驚く。標準化調査の背景にある統計的検定の考え方は100%の回収率を想定しているが、60%の有効回収率と、30%の不能票の分布が、ほぼ一致している可能性はきわめて低いといわねばならない。この点一つだけ取っても、標準化調査がかつて

誇った信頼性はかなりの程度低くなっているといわざるを得ない。内閣支持率、政党支持率などの世論調査について言えば、新聞各社、調査機関各社の結果がほぼ同一の方向を指しているということで、一応満足しているというのが現状ではないか。世論調査や国勢調査などの、質問・選択肢が慣習的にほぼ確定し社会的合意がある場合を除いて、個々の研究者が独自の問題意識に基づき質問文、選択肢を決めている多くの社会調査については、不安は更に大きいと言えよう。

第二の要因は、いっそう根源的なものである。既存の官庁統計・経済統計などによらず社会学者が企画実施する標準化調査の内容は、その研究者の問題意識によって多様であるが、しばしば事実に関する設問ではなく、意識・態度に関する設問の形をとることが多い。社会学者の問題意識に直接かかわる設問は、既存統計調査には求めにくいという事情もあってこのような傾向が見られるのである。これら意識・態度にかかわる設問群は、内容は千差万別であるが、しばしば重いとは言えないものである。「重い」とここで言うのは、能の世界である曲が重い能といわれる意味に相当している。主人公の境遇、抱えている問題状況が重大なものである時、演技・演出もまた重いものとなる。そのような比喻でここでは重いといっておく。設問が軽いとは、被調査者にとっては、それほど考え込まなくて良い事柄であったり、時間の変化によって容易に回答が変化する可能性の高い事柄であることを意味する。食べ物や着るものの銘柄選択は、一般的にいて比較的容易に変える、あるいは変えることができる。政党支持などは一般的にはそれよりもやや重い事柄に属する。

デュルケムは社会的事実という言葉を用いている。彼にとって自殺率という数字は社会的事実である。自殺という行動の選択は、個人にとって一生に一度するか否かの重い決断である。その自殺率が社会的に、つまりある属性の人々について高く、別の属性の人々について低いというのは、まさに社会的事実であるということになる。標準的調査の設問が、しばしば軽い選択を問うているという認識が、標準的調査が時としてどうでもいい事柄を問うているという認識につながっているのではないか。

私がかれこれ50年も前に、データ変換的方法という問題提起をしたのは、多くの意識・態度調査における軽さの問題とも関連して、見落とされがちな貴重なデータ源が多く存在することにもっと目を向けるべきではないかという点にあった。例示したのはナタリー・ロゴフの婚姻届書記載の結婚者の職業と父の職業の利用であった。親の職業と子の職業のクロス集計から、職業的地位の開放性をめぐる貴重なデータが得られた例である。本来行政目的から収集されたデータが、社会的地位の継承についての社会学的データが得られることを示したエレガントな調査設計に注目したのである。国勢調査を始めとする指定統計類は、もともと多様な分析のためのデータ源としての利用をも目的としているから、目的の変更を伴うとは言いきれないが、この種のデータの宝庫と言える。この場合は標準化調査の一種であるが、データ源を調査研究者の企画によらず、別目的で作成されたデー

タファイルを、社会学的目的に転用しようというものであった。

私がここ30年来取りくんで来た東京の社会地図という発想は、居住地選択という行動は自殺ほど重くはないが、個人あるいは家族の生活上重要な選択であることに注目している。そしてそれが何百万、何千万の人々の選択行動の積分として地域に刻印されていること、それはやはり社会的事実と呼ぶべき、「重さ」を持っていると考えるのである。いつ変わるかもしれない各種の商品の銘柄選択、政党や政策への好感度などに比べようもない重さであろう。

人間は街を選び、また街は人間を選ぶ。人間から見れば、街は地価や家賃や交通の便不便、さまざまな制約条件として、居住地選択を規制する。その制約の下で人間は自分の価値観、生活態度に基づき、一定の選択をする。この何百、何千万の選択が刻印した地域の特性を類型化し、視覚化することによって社会地図は、大まかには多くの人々によって感じられている都市の空間構造を、より精確な空間分布構造として認識することができる。原データは言語的に、カテゴリー化された素材である、単位地区ごとのそこに住む老人／青年人口比率、核家族世帯比率、専門的職業従事者比率等々であるが、これらの数値の類似した単位地区をクラスター分析によって析出された類型ごとに地図化・視覚化したものである。それはハルハウスの人々が制作した建物ごとに住む人々を示した地図と同様に、地域の、そしてそこに住む人々の、問題状況を示すのである。

このような考察から、一つの疑問点が浮かび上がってくる。ここで挙げた社会地図のデータ源は、それ自体は言語化されない視覚データ素材でないことである。ある単位地区に老人が何人住んでいるか、核家族世帯がいくつあるか、専門的職業従事者がどれだけいるかなどは、言語化された、そしてカテゴリー化されたデータであって、それ自体視覚化されたデータではない。視覚化は、それらのデータを分析——クロス集計だけでなく単位地区の類似性による類型化のためのKS法クラスター分析といった複雑な分析過程から析出された類型化分析——の結果を表示するために用いられ、そしてその分析結果は、社会地図として図像化され、視覚化される。

このシンポジウムは、社会地図も図像であり、動画中心というこのシンポジウムの直接の対象からははずれるが、映像社会学の範疇に含まれるという前提にたって進められた。それは適正であったのか。そもそも映像社会学にとって、映像はデータ源であるのか、研究結果の表示なのか、あらためて問われなければならない。

[5]

シンポジウムで山中氏が提示されたコリアタウンの映像は、データ源であろうか、はたまた研究結果の図像表示であろうか。山中氏が当日述べられたのは、この2年次の映像はコリアタウン関係者やその他の専門家による異なった視点からの読み解きを集め、そこか

ら具体的なファインディングスが導かれる、現在はその分析過程にあるということであった。したがってそれは基本的にデータ源として考えられているということであろうが、映像というメディアの性質として、データ源か、研究成果なのかという、単純な二分法にはなじまないのではないかと考えられる。この点はシンポジウム当日はまったく取り上げられなかった論点として、今後深められるべきものとする。

この場合視覚データというデータ素材の特性は、それが事実に関するデータであるという点にある。私がこの領域のデータを重視する理由の一つでもある。データそのものの「重み」ということはすでに述べた。シンポジウムで山中氏が提示されたコリアタウンの映像は、もちろんすべての映像データがそうであるように、事実に関するデータである。映像をどのような視覚で切り取るかを別にして、映像データは、商品の種別、商店の陳列様式、特定の場所にある商品、価格表示、色彩、どこを切り取っても何れも事実である。問題は標準化調査に即して言えば、データ単位が何であるか、この点が自明とは言えないことである。これらはデータ単位であるとともに、分析のある段階のデータもしくは分析結果でもある。この先に迷路が待っている。

映像というデータ特性から、標準化調査の用語に置き換えて解釈を試みるのが、そもそも無理ないし無意味な試みであるのかもしれない。

当面一つの解は、一つの映像社会学的調査をモノグラフと考えることであろうか。社会学辞典の定義によれば「一つの社会的単位（個人・家族・集団・制度・コミュニティなど）全生活過程あるいはその若干の側面に関して詳細なデータを記述するもの」とある。そこでは信頼性などの標準化調査の評価基準を離れて、データの読み解き方、要因間の関連などなどについての考察の、妥当性が問われることになる。一種の作品性とも言い換えることができるかもしれない。山中氏のコリアタウン研究について言えば、予告されている専門家の読み解きの集積と分析から、どのようなファインディングスが導かれるか、それがどのような説得性を持つかが、当面問われることになる。私の放送大学教材の例では、印刷教材と呼ばれる言語中心のテキストと、放送教材と呼ばれるビデオが成果物であるが、コリアタウンの場合はどのような形態の成果物が提示されるのか、期待と興味が尽きない。

当面多くのモノグラフ作品が制作され、比較され、評価されるという過程が、必要であろう。

（くらさわ すすむ／東京都立大学名誉教授）